

## 序 マン・レイの生涯と作品

### ユダヤ人移民の家庭に生まれて

マン・レイことエマニュエル・ラドニツキーは、一八九〇年にフィラデルフィアで生まれた。父メラックはウクライナ、母マーニャはベラルーシ出身の東欧系ユダヤ人で、一八八〇年代後半にアメリカへ移住してきた。当時のフィラデルフィアは、アメリカにおけるユダヤ人コミュニティの重要な拠点の一つであり、一八八〇年代までは主にドイツ系が中心だったが、一八八一年のロシア帝国でのポグロム（ユダヤ人虐殺）を契機に、東欧からの移民が急増した。ユダヤ人は衣料産業、小売業、金融業など多様な職に従事し、街で大きな存在感を示していた。メラックも衣服縫製工場で働き、生計を補うためにマーニャと共に自宅で内職をしていた。こうして、ハギレや型紙、ミシン、針、アイロン、マネキン、ハンガーといった、のちの作品に登場するモチーフが、幼い日のマン・レイの身の回りに

自然と存在していたのである。

### ブルックリンへの移住

一八九三年に弟のサミュエル、一八九五年に妹のデヴォラが誕生した。そして、一八九七年、妹のエルカが誕生する直前に、一家はブルックリンに移り住んだ。そこでもやはり父は縫製工場で仕立て屋として働いた。当時、ニューヨークは急速に発展していた大都市であり、多くの移民にとって経済的チャンスをもたらしていた。一家の主は家族により良い生活を提供するため、衣服縫製業の中心地ブルックリンでの仕事を求めてこの決断をした。ブルックリンにはすでに活気あるユダヤ人コミュニティが形成されており、ロシア系ユダヤ人家族にとって文化的なつながりも期待できる場所だった。

この転居はマン・レイの人生に重要な転機となった。ニューヨークの多様な文化的環境と都市の活力は、彼の創造的視野を広げる重要な背景となり、のちの芸術家としての発展に大きな影響を与えることになったのである。

### ボーイズ・ハイスクール時代

一九〇三年、ユダヤ教の男子成人儀式であるバル・ミツバーを迎えた翌年、マン・レイはブルックリンのボーイズ・ハイスクールに入学した。一八七八年設立のこの名門公立高校は、ニューヨーク市

教育制度を代表する学校の一つだった。当時、多くのユダヤ系移民の子どもたちは、アメリカ社会での成功を夢見て勉学に打ち込んでいた。移民の子どもたちは、公立学校を通じてアメリカの言語や文化、価値観を身につけ、社会に溶け込むことを期待されていた。大学進学を視野に置いた高い学問水準を誇ったボーイズ・ハイスクールは、社会的上昇をめざす移民家庭の子どもにとって貴重な教育の場であった。こうした質の高い教育へのアクセスは、彼らのキャリア形成において重要な足がかりとなったのである。マン・レイの両親もまた、息子が良質な教育を受け、アメリカ社会で安定した地位を築くことを強く望んでいたに違いない。これは、多くの移民家庭と同様に、教育こそが社会的上昇と経済的安定への道だと信じての選択だったのである。そして、一九一二年には、反ユダヤ主義への対応とアメリカ社会への同化のため、一家はラドニツキーからレイに改名し、エマニュエルは「マン・レイ」と名乗るようになる。

### 芸術への目覚め

実際、マン・レイは両親の期待に応えた。成績は優秀で、なかでも機械製図の授業で際立った才能を発揮した。この頃から美術への関心もはつきりと表れ始める。一九〇六年には、日本の浮世絵版画を模写し、油彩画として仕上げている。さらにアルフレッド・ステイーグリッツが運営する「二九一画廊」にも足を運ぶようになり、そこで数多くのヨーロッパの近代芸術作品と出会った。この画廊では、西洋近代芸術に強い影響を与えたアフリカの仮面なども展示されており、彼がキャリアの初期か

ら非西洋文化に触れていたことがわかる。

一九〇八年、マン・レイは無事にハイスクールを卒業した。ニューヨーク大学から建築を学ぶための奨学金資格を得たものの、最終的にはこれを辞退し、デザイン事務所で働きながら絵画制作に専念する道を選んだ。

### 前衛芸術との出会い

マン・レイは一九一二年秋ごろから、マンハッタンのフェレルル・センターの美術クラスに通い始めた。フェレルル・センターは、アナーキズム思想に基づく自由教育と芸術の実験場であり、知識人や前衛芸術家が集うラディカルな学びの拠点となっていた。

一九一三年には、ニューヨークでアーモリー・ショーが開催された。印象派からキュビズムまで約一三〇〇点を網羅したこの展覧会は、ヨーロッパのモダニズム作品を大規模に紹介し、保守的だったアメリカ美術界に衝撃を与えた。マン・レイも会場を訪れ、マルセル・デュシャンの《階段を降りる裸婦像》に強い感銘を受けている。

この体験に触発された彼は、制作に専念するため、ニューヨークから北へ約六十マイルの田園地帯リッジフィールドに移り、友人たちとコテージで共同生活を始めた。そこでベルギー生まれの詩人アドン・ラクロワ（愛称ドンナ）と出会い、一九一四年に結婚する。ドンナを通じて、マン・レイはアポリネール、ボードレール、マラルメ、ランボーといったフランス文学に触れた。そして何よりもロー

トレアモンの作品との出会いは決定的であり、のちにオブジェ《イジドール・デユカスの謎》(別図1)を生み出す重要な契機となったのである。

ドンナとフランス移住を計画するも第一次大戦勃発で中断せざるを得なかったが、フランスへの憧れは次第に現実味を帯びていった。運命に翻弄されたかのようにも思えるが、第一次世界大戦は彼をフランスから遠ざけただけでなく、別の形でフランスと結びつける要因ともなった。この未曾有の紛争により、合理性への社会の信頼を喪失し、既存の価値を否定する芸術運動、ダダがニューヨーク、チューリッヒ、パリで誕生し、マン・レイはニューヨーク・ダダ運動の進展に大きな役割を果たすことになる。

### デュシャンとの出会いとダダ

一九一五年頃、前衛芸術家の庇護者であるウォルター・アレンズバーグを介してニューヨークに越してきたデュシャンと知り合い、二人は一生涯にわたる友情を育むこととなる。また、マン・レイ、デュシャンに加え、ニューヨーク・ダダ三銃士の一人に数えられるフランシス・ピカビアと出会ったのもアレンズバーグ宅だった。翌年の一九一六年にはドンナとともにニューヨークに戻り、益々精力的に芸術活動を展開する。同年十二月にはニューヨークのダニエル画廊で三十点の絵画を展示した初めての個展を開催した。この展覧会は芸術家としてのキャリアを前進させただけでなく、新たな表現手段との出会いをもたらした。マン・レイは展覧会のカタログに作品を掲載するために自らの絵画を